HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	最近話題の（？）マルキオン福音書
Author(s)	佐々木, 啓
Citation	基督教學, 59, 21-30
Issue Date	2024-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92963
Type	journal article
File Information	02sasaki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

(41) Mealand, "The Close of Acts and its Hellenistic Vocabulary," p. 586.
(42) Mealand, "The Close of Acts and its Hellenistic Vocabulary," pp. 589-595.
(43) Mealand, "The Close of Acts and its Hellenistic Vocabulary," pp. 590-591 は、言語的側面についても推定する。
(44) Mealand のほか、Pervo, *Acts*, pp. 688, 688n81 も参照。
(45) それゆえ、パウロが妨げられないのは、神の国とイエス・キリストの宣べ伝えではなく、パウロの生そのものなのかもしれない。

研究ノート

最近話題の（?）マルキオン福音書先行説

佐々木　啓

この研究ノートのタイトルの（?）には二つの意味がある。

ひとつは、ここでとりあげる「マルキオン（一世紀末～二世紀半ば）福音書先行説」とでもいうべき、福音書のみならず、新約聖書正典そのものの成立に関わる仮説だが、これが、日本では、関連の学会においても全く問題になっていない、と思われることである。私の見た限りでは、この仮説に関連する研究発表なども、キリスト教学会や新約聖書学会などでもまったくない、と言っていいように思える。これが、（?）の一つ目の理由である。

（?）の二つ目の理由は、タイトルの「最近」という部分にかかわる。そもそも、この「マルキオン福音書先行説」は、関連する欧米の学界では、かつて話題になっていたことではないか? というより、実際、昔すでに話題になっていた、という事実である。

新約聖書学の世界では、たびたび、かつてあった研究のトレンドともいうべきものが繰り返される傾向があるように思える。たとえば、Rudolf Bultmann（1884-1976）あたりで終わったかと思われたいわゆる「史的イエス研究」のリバイバルが二〇世紀後半に起こり、ついに新しい聖書の日本語訳にまで影響を与えた「パウロの属格」の問題なども、古典というべき James Hope Moulton（1863-1917）の文法書などを見る限り、ずっと以前から議論されていたことがわかる。そういった意味で、これは「最近」なのか、というのが（?）の二つ目の意味である。

今日この仮説をとり上げるのは、この「マルキオン福音書先行説」という仮説にかかわる議論の展開は、私が、ヨハネ福音書から始めた新約聖書やキリスト教の歴史の探究において、長年疑問に思っていた事柄について、解決の方向性を示してくれる仮説と考えるからである。

それらは、ある意味ではごく単純な疑問である。たと

えば、いちばん遅くに書かれたとされるヨハネ福音書の註解書の歴史が、なぜ一番古く、オリゲネス（一八四／五年～二五三／四年）に遡るのか？しかも、それはグノーシス主義者ヘラクレオン（一四五年～一八〇年頃活躍）のヨハネ福音書註解に対抗するもので、さらにそれ以前に、なぜ同様にグノーシス主義者のプトレマイオス（二世紀頃）がヨハネ福音書のプロローグの註解などを書いたのか？それなのに、四世紀のヨアンネス・クリュソストモス（三四七年頃～四〇七年）のヨハネ福音書の Homilie では、こちらはなぜプロローグ（ヨハネ福音書一章一節～五節と同九節～一八節）への言及がないのか？それに対して、一番古いとされるマルコ福音書には、どうして古いパピルスが存在しないのか？

ところが、こういった疑問についていろいろ探究し考えを巡らしているうちに自分なりに行き着いていた（暫定的ではあるが）推測と、実のところその後、むしろ最近出会ったこの「マルキオン福音書先行説」が提示している、福音書を含む新約聖書正典やキリスト教という宗教そのものの成立についての基本的考え方が、ほぼ私自身と同じような方向性を持っていると思えたのである。

この「マルキオン福音書先行説」の提唱者である Markus Vinzent（*Marcion and the Dating of the Synoptic Gospels* [Studia Patristica Supplement 2], Peeters, 2014. 以下 V と略記）や Matthias Klinghardt（*The Older Gospel and the Formation of the Canonical Gospels* [Part I: Inquiry, Part II: Reconstruction - Translation - Variants], 2 vols., Peeters, 2021. 以下 K と略記）といった研究者たちは、興味深いことに（一九五九年生まれの）私と全く同世代（Vinzent は一九五九年生まれ、Klinghardt は一九五七年生まれ）なのだが、この二人の主要な業績だけでも二〇〇〇ページを超える分量の書籍であり、関連する文献は無数と言ってもいい。

まず、この「マルキオン福音書先行説」の要諦を記す。それは、「最初に福音書なるものを書いたのは、いわゆる異端者とされるマルキオンであり、場合によっては、共観福音書のみならず、ヨハネ福音書を含む正典福音書はみな、そのマルキオンによる（最初の）「福音書」を下敷きにしている」という仮説である。この仮説がいかに驚

くべき仮説であるかは、言うまでもない。

周知のように、「異端者マルキオンは、正典ルカ福音書を（いわば勝手に）削って、縮小して、独自の福音書を偽造し、それにパウロの一〇の手紙を加えて『正典』なるものを（いわば）でっちあげた。しかし、それに刺激されて（いわゆる）正統派の側が「正典」なるものの結集を始めた」というのが定説とされている。

これはエイレナイオス以来の伝承に基づき、Adolf von Harnack（1851-1930）や Hans von Campenhausen（1903-1989）らの業績によって定着した教科書的な考えである。それを今更ひっくり返そうというのは、何事なのか、ということになるが、そこそこが話の始まりで、先述の二番目の（？）と関連する研究史が問題となる。

Vinzent によると、この「マルキオン福音書」は、「一八五三年以降、共観福音書問題の議論からほとんど消えてしまった」（V, p. 145）。しかしながら、Vinzent の周到な研究史のサーヴェイによれば、これは「干からびてしまった」（*ibid*）わけでなく、古くは、John Knox（1900-1990）や、近年では、先の Klinghardt や Judith Lieu（"Marcion and the Synoptic Problem," in P. Foster a. o. (eds.), *New Studies in the Synoptic Problem*, Peeters, 2011）などによって、主として英語圏から再び論じられるようになったという。

特に、単に「共観福音書問題」の枠を超えて、この「マルキオン福音書先行説」の先駆けたる研究として、James Rendel Harris（1852-1941）、Heinrich Joseph Vogels（1880-1972）、とりわけ Paul-Louis Couchoud（1879-1959）の著作（*Jésus: Le Dieu fait homme*, F. Rieder, 1937）をあげている。最後の Couchoud は、新約聖書学者でもなく、職業としては精神科医、日本の俳句をフランスに紹介した詩人ともいうべき人物だが、彼は、「キリスト神話が一二八／九年にマルキオンによって福音書という歴史的物語になった」という説を唱えた。もちろん、キリスト教関連の学界からは激しく否定されたわけだが、Vinzent によれば、Couchoud による資料の批判的な読解は、「真剣な検討に値する」（V, p. 143）。

しかしそもそも、イエスの実在すら否定するこういった方向性は、Bruno Bauer（1809-1889）にまで遡るわけだが、ドイツにおけるこの「マルキオン福音書先行説」の

提唱者は、Bruno Bauer ではなく、Ferdinand Christian Baur（1792 - 1860）の弟子の Albert Schwegler（1819 -1857）を嚆矢とする。そして、その Schwegler の考えは、Albrecht Ritschul（1822-1889）によっても支持され、「マルキオン福音書はルカ福音書を切断したものなどではなく、その基（もとい）なのだ」と論じられたという（V, p. 151）。

「マルキオン福音書先行説」を再び論じるためには、エイレナイオス（二世紀後半）やエピファニオス（三一五年頃～四〇三年）など、いわゆる「異端」を反駁する教父たちのマルキオンに関する資料、とりわけテルトゥリアヌスの『マルキオン駁論』などを徹底して読み直す作業が必要となる。このような作業はいわゆる「教父学」の領域に入り、Vinzent 自身は教父学領域の研究者だが、彼によれば、新約聖書学なる分野は、比較的新しい領域であり、それでだけではキリスト教の歴史どころか、新約聖書それ自体についての客観的、歴史的研究はあり得ない（Vinzent, *Christi Thora: Die Entstehung des Neues Testaments in* 2. Jahrhundert, Herder, 2022, S.11）。

かくして教父たちの記述を詳細に検討した Vinzent の結論をまとめると、以下のようになる（主にテルトゥリアヌス『マルキオン駁論』の四章と『異端者への抗弁』三八章による［V, pp. 97-100］）。

ともかくも、マルキオンが初めて、イエスの言葉を物語（narrative）の中に組み入れて、「福音書」というジャンルを出現させた（これは Couchoud と同じ考えになる）。

それはしかし、いわば「私家版」として流布されたのだが、それを真似て、というか利用して、さまざまな福音書、特に、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという正典福音書が書かれた。

ところが、それを剽窃（plagiarism）、あるいは偽造（forgery）と見做したマルキオンは、「（自分の名も冠していない）福音書（そのもの）」として、それを今度は公に（いわば出版）した。

しかしその際、マルキオンは、ユダヤ教というか旧約聖書の神（創造神）ときっぱり手を切ろうとして、自らの「福音書」の趣旨を説明した「対立論」や「対論」などと訳される *Antithesis* (*ἀντίθεσις*) という序文のようなものを付し、「使徒書」などと訳される *Apostolikon* (*ἀποστολικόν*) というパウロの一〇の手紙を編纂したものと合わせて世に出し、これが正統派による後の「正典」制定にきっかけを与えた。

そして、Vinzent は、その初めての「正典」とも言うべき「福音書」が公にされた年代も「一四四年の夏」とまで推定しており、「私家版」の方は、マルキオンが一三八～一四四年のローマにいる間、あるいはそれ以前にポントスで出されたと推定している（V, p.138. いずれもテルトゥリアヌス『マルキオン駁論』の読解による推論）。

マルキオンと「マルキオン福音書」については、田川建三『書物としての新約聖書』（勁草書房、一九九七年、五七、六六～七六頁、以下、田川と略記）に手際よくまとめられており、ただ一点を除けば、Vinzent がまとめている事柄と基本的には特に違っているわけではない。ただその一点が決定的であり、田川は、「マルキオンはルカを削ってできたものである」という、Harnack = Campenhausen 路線を堅持しており「この両者を読めば、今日ひどく間違えることはないだろう」（同五七頁）と書いている。

そうすると、なぜ「マルキオン福音書先行説」の方が正しいのか？ということになるが、Vinzent の議論は、そのように、つまり、「マルキオン福音書」が最初に書かれた福音書であると考えても、諸々の教父たちの記述と矛盾しない、もう少し積極的に言えば、そのように読むのがより整合的である、となる。この Vinzent の考え方の根底にあるのは、「正統派が先にあり、異端は、その後（その正統派から）逸脱して生じた」という「正統派」的な前提が、従来の、学問と称するキリスト教の「歴史的」研究などにすら見られる、と批判しているいま一人の Bauer たる Walter Bauer（1877-1960）の考えが伏線としてあるように思われる（V, p.7）。

しかし、そうなると、新約聖書研究をほんの少しでも齧ったことのある者としては、従来の新約聖書研究、特に「共観福音書問題」などとの整合性はどうなるのか？といった疑義がただちに生じる。つまり、福音書研究の世界では、特に日本では、いわゆる「二資料仮説」が公準化しており（と思うが）、それに従う形で、各「正典」福音書の執筆年代などは、マルキオンよりずっと早い時

代に見積もる考えが、教科書的に一般に紹介されているからである。

そこで、Vinzent はいわゆる「共観福音書問題」の再検討を行なう。しかし、たとえば、マルコ福音書の執筆年代にしても、古く見積もる紀元四〇年の少し後とする研究者がいる一方で、最近の研究者の中にもそれを一〇〇年～一二五年と見積もる者もいるなど（V, pp. 161-163）、千差万別であり、マタイやルカの成立年代の推定についても事態は同様である。

共観福音書相互の関係についても、「二資料仮説」優勢に思える日本だけでなく、欧米の学界にも目を向けるならば、いまだにマタイ福音書を最初とする考えがあるだけでなく、いわゆる Q 資料も加えて、四つ巴どころか、さらに複雑な様相を見せている（例えば、佐藤研『聖書時代史 新約篇』岩波書店、二〇〇三年の冒頭に掲げられたダイアグラム参照）。すでに二〇世紀の初めに、Friedrich Blass（1843-1907）は、「この（共観福音書問題にまつわる）問いは、まったくバラバラである。なぜなら、これやあれやの考え方はいろいろな〈理由 reasons〉に主に重きを置いているわけではないからである。それは何よりも決定しようとするわれわれの〈意思 will〉（の問題）なのである」（V, p. 212）と述べていた。

そこで次に、Vinzent は、「マルキオン福音書先行説」を補強する議論として、福音書のパピルスの問題をとりあげる。この点は、先に述べたような、私自身が以前から気になっている問題の一つである。それは、なぜ新約聖書の最も古いパピルスは、「二資料仮説」に基づくならばマルコなはずなのに、そうではなくヨハネのものなのか？ それは、マンチェスター大学の図書館にある一二五年頃のものとされる $\mathfrak{P}^{52}$ であり、マルコの最古のパピルスは三世紀のものとされる $\mathfrak{P}^{45}$ になるまで出てこないのはなぜなのだろう？ といった疑問である。

この $\mathfrak{P}^{52}$ にしても、それに関連して、本文批評の大家である Bruce M. Metzger（1914- 2007）は、かつて（一九六九年に）「かのすぐれたテュービンゲン大学教授、フェルディナンド・クリスチャン・バウルに影響を受けた新約聖書批評の学派が、第四福音書の成立は一六〇年以降であると論じることもなかったであろう」と皮肉を込めて書いていたが、一九九二年に Walter Schmithals（1923-2009）は、新約学においてこの $\mathfrak{P}^{52}$ を用いるのは、「軽率だ（leichtfertig）」と記している（V, p.216）。

ヨハネ福音書の話はともかく、パピルスの年代決定については、その筋でも問題になっており、Roger S. Bagnall という研究者は、二〇〇九年の著作で、エジプトのパピルスや文献の研究における「極めて閉鎖的な性格と自覚のなさ」を強調しており、その結果として、「古代社会の基本的な現実や基本的な蓋然性とひどく食い違っている」と述べている（V, p. 217）。

したがって、少なくとも現在までのところ、パピルスのような外証は、「マルキオン福音書先行説」に対する反証となり得ない、というのが Vinzent の主張だと思われる。さらに、教父による聖書の引用や暗示箇所を網羅的に調べ上げた *Biblia Patristica* (CNRS, 1986) のアレクサンドリアのクレメンス（一五〇年～二一五年頃）とテルトゥリアヌス（一六〇年頃～二二〇年以降）までの第一巻によれば、マルキオンの時代以降の四福音書からの引用とされる箇所が一万件以上示されているのに対して、マルキオン以前のものは「皆無（do not provide a single one）」だと述べられている（V, p. 224 など）。

次に Vinzent は、初期の教父をさらに検討して、ユスティノス（一〇〇年頃～一六五年頃）を待って初めて記述された福音書が言及されているとし、さらに、いわゆる使徒教父（文書）やアテネのアリステイデス（～一四〇年頃）などについても詳しく検討し、そもそも一つの記述された「福音書」という意味で εὐαγγέλιον という言葉を用いたのもマルキオンが最初だ、と断じている（V, pp. 254 f.）。

結局、後に「正典」となる四つの福音書を権威づけたエイレナイオス以前には、その四つの福音書に突出した位置を与えた者はおらず（ここまでならば、田川も同じ、というか Campenhausen なども同じ［田川、六八、九三～九四頁］）、それ以降は、テルトゥリアヌス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネス、そしてエウセビオス（二六〇年頃～三三九年）などが、そういった権威づけに従っているとする。ただし、二世紀の終わりのエイレナイオスの時には、未だそういった権威づけのための議論が必要だったわけであるし（『対異端駁論』）、エイレナイ

オスがヨハネ福音書を知っていたことは確かだが、マルコやルカ、使徒言行録などを（資料として）手もとに持っていたかどうかについては要検証とも指摘されている（V, pp. 226 and 66）。

もし、従来の福音書研究のように、一世紀中に口頭伝承だけに基づいて成立した「正典」福音書が独立して存在していたならば、なぜマルキオンの時代になるまでそれが知られていなかったのか？あるいは、物語素材と語録素材をつなげた編集過程があったとして、それらがその編集者たちだけによってコピーされ、特に、「物語部分」は、なぜ二世紀も半ばになるまで誰にも引用されていないのか？さらに、そういった福音書が、なぜバラバラの地域で何十年も隔てて排他的に成立したのか？といった疑問を Vinzent は投げかけている（V, p. 255）。

Vinzent は、以上のような（ここではとうてい説明し尽くせない、はるかに精緻なと言っていいと思うが）議論を経て、最後に、再構成された「マルキオン福音書」と正典福音書との比較を行なって、「マルキオン福音書先行説」のダメ押しを図っている。

ここで、Vinzent だけでなく、もう二人の「マルキオン福音書先行説」の提唱者を付け加えておく。一人は、（一九六三年生まれの）Jason D. BeDuhn という研究者で、Vinzent とほぼ同時期に書かれた *The First New Testament: Marcion's Scriptural Canon*, Polebridge Press, 2013.（以下 B と略記）という著書において、「マルキオン福音書」の、英語によるものだが、再構成を試みている。

それに続いて、この BeDuhn の著作や、筒井賢治が日本聖書学研究所の欧文雑誌に寄稿した、オリゲネス福音書の再構成（"Das Evangelium Marcions. Ein neuer Versuch der Textrekonstruktion," *AJBI* 18, 1992, pp. 67-132）なども参照しつつ、先に言及した Klinghardt による二巻の著作がある。およそ五〇〇頁のその一巻目では、"Inquiry" と題して、「マルキオン福音書」についての捉え方と、その再構成の方針が書かれており、大雑把に言えば、Vinzent と似たような議論を展開している。それに対して、実際に「マルキオン福音書」を、こちらはギリシャ語での再構成をも試みている "Reconstruction -Translation -Variants" と題された二巻目は、詳細な注とともに、実に一四〇〇頁を超

える大著となっている。

BeDuhn は、かつて Johannes Salomo Semler（1725-1791）が唱えた説を採用して、ルカとマルキオンは、同じ、「原福音書」とでもいうべきものに基づいて編纂されたとしているが（B, p. 91）Klinghardt は、以前の自身の論文（"The Marcionite Gospel and the Synoptic Problem," *NovT* 50, 2008, pp. 1-27）からは考えを変えて、前述の大著では、「マルキオン福音書先行説」を唱えるに至っている。ただし、Klinghardt は、Vinzent のようなマルキオン福音書の、いわば「二段階成立説」ではなく、端的にルカ福音書が「マルキオン福音書」を下敷きにして成立している、と考えているようである（K, Part I, pp. 193 ff.）。この再構成作業は、基本的には、テルトゥリアヌスの『マルキオン駁論』、エピファニオスの『パナリオン』、そしてアダマンティオス（三世紀終わり／四世紀初め）の対話篇 *De recta in deum fidei* などによって為されている。

最後に、この「マルキオン福音書先行説」の成否を検証する作業として参考になる例は、やはりここで主に紹介した Vinzent の *Marcion and the Dating of the* Synoptic Gospels や、さらに彼が、二〇二二年に出版した *Christi Thora* の中に見られる。それは、要するに、正典四福音書の他に、再構成された「マルキオン福音書」（そして、場合によっては、「ペテロ福音書」のような外典福音書など）をも含めた「対観表 = synopsis」を作成して相互に比較検討してみる作業である。

たとえば、「マルキオン福音書」では、のっけから突然イエスがガリラヤのカペナウムの町に天下るわけで、イエスの誕生物語は全く欠けているが、ルカとマタイにはそれが長々と、しかもかなり異なった物語がある。そのように、「マルキオン福音書」に欠けているところでは、共観福音書の記述が非常にばらけているが、その後再び、マルキオンとの並行が始まるところでは、全部の並行が見られ、場合によっては逐語的にそうだ、ということなどである（V, pp. 262 ff.）。

たとえば、以下は、Vinzent の翻訳を敷衍した私訳である。

「もしマルコが共観福音書（さらに、ルカを削ったとされるマルキオン）の資料だとすれば、なぜ、どの証言もマルコの一六・一に従わず、しかし一六・二（から始めて）

並行しているのか？しかし、一六・二がマルキオンによると考えれば驚くことではない。なぜ、皆はマルコ一六・三―四に従わず、マルコ一六・五だけをとりあげているのか？ルカがマルコに従っているなら、なぜルカは、マルコ一六・二、五には正確に従いながら、そうしただけで、一六・三―四を飛ばしているのか？マルキオンを見てみると、（マルキオン二〇・一―二）は完全な連続体をなしており、五つの福音書の箇所全てに並行している。四つの福音書全部が独立していると考えるのはナンセンスだろうから、もしマルコが他の三つの福音書の箇所の資料だとすると、マルコ以外は一六・一には従わず、一六・二を使い、一六・三―四は採らずに、しかし再び一六・五に従うというふうにして、お互いに知るか、どれかを資料とする必要があっただろう。しかし、みなマルキオンに従っていると考えれば、説明は容易である」（V, p. 274）。

その他にも、このように眺めまわしていると、いろいろと見えてくることがある。たとえば、マルキオンはルカを「削った（だけ？）」と言われるが、ルカにある単語、比較的単純な言葉すらマルキオンとは異なっていたりする（V, pp. 256 ff.）。また、ルカとは異なるが他の福音書と並行する単語も見られる。さらに、ルカにない章句もあり、それだけではマルコがルカを削ったとされることの反証にはならないとしても、場合によっては、それが他の福音書と並行している箇所（たとえば、マルコ一六・三とマルキオン二〇・一の並行など）はどう考えるべきなのか？

さらには、「マルキオン福音書」の、正典四福音書のみならず、「ペテロの福音書」などとの並行や、いわゆる「西方型本文」との類似などが指摘されている（V, p. 273）。

先に言及したLieuは、いわゆる「共観福音書問題」について、この「マルキオン福音書先行説」とも絡めて、「いずれにせよみな仮説である」（Lieu, *op. cit.*, p. 746）と言っているが、それはそうだとして、むしろそうであるが故に、BeDuhnが書いているように、「これは、多くの場合先立つ神学的判断から現代の学問的研究にまで直接持ち込まれ固守されてきた前提からは解放された、キリスト教史と聖書の歴史の真剣な探究の、終わりではなく、始まりなのだ」（B, x）ということにはなるであろう。

書評

『クィアな新約聖書 ―クィア理論とホモソーシャリティ理論による新約聖書の読解』（風塵社、二〇二三年）

小林昭博著

吉谷かおる

本書は、二〇二一年に刊行された『同性愛と新約聖書――古代地中海世界の性文化と性の権力構造』（風塵社）で、キリスト教が生み出した同性愛への偏見を聖書学から正面切って批判した小林昭博氏の近著である。前著は大部の学術書でありながら多くの読者を得ていると聞くが、多彩な内容の研究業績をコンパクトに収めたこの『クィアな新約聖書』はより手に取りやすく、ことにフェミニスト神学とクィア理論に関心を持つ読者にとっての待望の一書といえるだろう。

聖書は、今日わたしたちが抗わねばならないジェンダー・セクシュアリティに関わる差別・抑圧、すなわち「家父長制」（patriarchy）、「女性嫌悪」（misogyny）、「同性愛嫌悪」（homophobia）、「異性愛主義」（heterosexism）、「強制的異性愛」（compulsory heterosexuality）、「異性愛規範」（heteronormativity）、「シス規範」（cisnormativity）といった差別・抑圧の論理を支えるものとして用いられる。前著は、新約聖書と旧約聖書には「同性愛」に関する記述は存在せず、「同性間性交」に言及する聖書の諸テクストが「同性愛は罪である」という言説の典拠になりえないことを明らかにするものであったが、著者が予見している通り、「同性愛は罪だと聖書に書いてある」と言い放って同性愛者を断罪する者たちは簡単にはいなくならず、差別も根強く残っている。フェミニスト聖書学を伸延し、キリスト教の再構築を目指す本書の「クィアな読解」の試みは、研究者に限らず、教会をはじめとするキリスト教のミニストリーの現場にフェミニスト聖書解釈から学んだ成果を持ち込んで、社会にコミットし、変革につなげようとする者たちを鼓舞する新たな力となるものである。